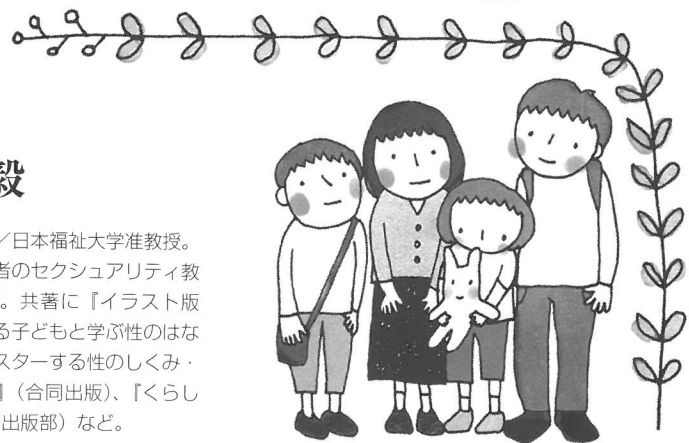


# セロから学ぶ若者のセクシュアリティ 障害のある子ども



日本福祉大学

伊藤修毅

いとう なおき／日本福祉大学准教授。  
専門は障害児・者のセクシュアリティ教育、  
青年期教育。共著に『イラスト版  
発達に遅れのある子どもと学ぶ性のはなし—  
子どもとマスターする性のしくみ・いのちの大切さ』  
(合同出版)、『くらしの手帳』(全研出版部)など。

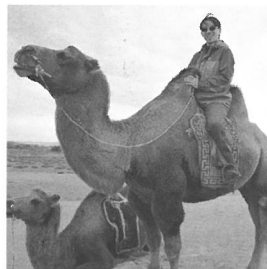
## 第8回 セックスワークと障害者

セックス(性交)を3つに分類することがあります。「生殖のセックス」「ふれあいのセックス」に加え、「利益のセックス」「支配のセックス」「暴力のセックス」などと言われる「望ましくないセックス」があり、「生殖のセックス」や「ふれあいのセックス」とは区別されるべきという考え方にもとづいてつくられる分類です。今回は、この「3つ目のセックス」から話を始めます。

### 利益・支配・暴力のセックス

まず、性教育の大先輩である山本直英さんの本<sup>1)</sup>から、この「3つ目」についての記述を引用します。

三つめは、性交を「手段」として何らかの見かえりを期待する「利益の性」です。人権を無視した売買春、性(とくに女性の性)を商品化したポルノグラフィがこれに含まれるのは当然ですが、養ってやっているからやらせろ、養ってもらっているからおつとめしてという意識での夫婦関係、相手との関係を続けたいために気がすすまないのに性交してしまう場合など



も、きびしい言い方をすれば「利益の性」になります。

1994年の文章ですが、「とくに女性の性」という括弧書きは、商品化される性は女性の性だけではないことを暗示しています。現在では、女性向け風俗店やトランスジェンダーのセックスワーカーなどの存在も可視化され、商品化される性はすべて女性の性という思い込みは誤りであると言えますが、当時としては卓越した見方だったのではないでしょう。また、DVやデートDVという言葉が一般化していない時代に、夫婦間でも「3つ目のセックス」があることを示した点も、先見の明と言えます。

しかし、「人間の性的な感情や行為は、本来極めて多様なものです。(中略)近代社会はその多様な人間の性的な感情や行為を、『正しい性欲・性行為』と『間違った性欲・性行為』に分けました<sup>2)</sup>」という指摘もあり、生殖のセックス・ふれあいのセックスを「正しい性行為」、それ以外を「間違った性行為」と単純に分類することには、安易な〇×式の性教育に陥らないためにも、慎重である必要がありそうです。

性教育において、何らかの「望ましくないセックス」があることはおさえるとしても、何が望ましくないか、特定の価値観を押し付けることは控えてはなりません。何を「望ましくない」とするか、考え、判断できるような情報を提供し、集団の中で議論していくような学習が求められます。

### 風俗店の利用

講演などでマスターベーションの重要性を語ると、「自分一人でマスターベーションをするのがむずかしいのですが、風俗を利用させた方がよいでしょうか?」という類いの質問を受けることがあります。「自分一人ではむずかしい」の事情はそれぞれですので、一概に答えるのが、なかなかむずかしい質問です。「肢体障害により手を自由に使えない」ということであれば、TENGAの活用やホワイトハンズ<sup>3)</sup>の紹介などをします。ホワイトハンズというのは、坂爪真吾さんが始めた自力での射精がむずかしい男性への射精介助のとりくみです。詳しくは、坂爪さんの『セックス・ヘルパーの尋常ならざる情熱』(小学館新書)

をお読みいただければと思いますが、このとりくみは一つの回答でもあり、賛否はともかく、重要な問題提起でもあります。風俗店の利用を積極的に奨励する性教育はないと考えています。しかし、「同年齢の市民」が利用できるものを「障害者だから」という理由で妨げることには違和感があります。

### 風俗店で働く人について

ここ数年、主に女性で軽度の知的障害者が、風俗産業に搾取されていることが示されています。その例として、今年5月の毎日新聞の記事を紹介します。

この記事は、「暴力は最も弱い人に向けられる。しかも性暴力は見えにくい。知的障害や発達障害をもつ女性は、障害の特性につけ込まれて男性の性的な欲求のはけ口にされたり、風俗産業の食べ物にされたりする上、被害をうまく訴えられず認められないこともある」と始まります。そして、「『風俗で働く(知的・精神・発達)障害者は少なくない』。風俗業関係者や性暴力被害の支援者は口をそろえる」とし、「風俗スカウトと知らず